

昭和47年2月1日第3種郵便物認可
平成17年8月1日発行（毎月1回1日発行）
俳句雑誌 沖 第36巻第8号



俳句雑誌[おき]

8月号

沖 発行所

植ゑてよ

林 翔

登四郎・翔の受賞

平成5年6月11日の朝日新聞の切り抜きを私は大切に保存している。

見出しは「俳人能村登四郎さん」
「うたの舞台」。江戸川の流れと矢切の渡しの渡し舟を背景にベレー帽を浅く被りノーネクタイで、歯を見せて微笑んでいる登四郎氏。10×16cmの大きなカラー写真である。記事は三百字の長文なので抄録するとへ蛇笏に続いて詩歌文学館賞で大賞を総なめた能村登四郎さん。――中略――泳ぎと歌舞伎と銀座が大好きな82歳。「心が健康だと明るい句ができる。作品にユーモアがあるなどと言われると、私の心は健康なんだとうれしくなる。」以上は11面で、13面に「北上」と題する5句と、短かい随想が署名入りで載っている。

さて、十二年遅れで私も詩歌文学館賞を頂いた。招待状には「御夫妻で」とあり、二人分のグリーン乗車券が送られてきたので、妻も同行し

大 仏 の 薄 泪 否 走 り 梅 雨

大野萬木句碑（長谷寺）

萬 木 の 字 こ そ 勁 け れ 山 紫 陽 花

苗 代 の 声 な き 叫 び 「 植 ゑ て よ 」 と

紫 陽 花 の 無 数 そ れ よ り 雨 無 尽

夏蝶の恋の舞踏を窓越しに

蚊の腹をしげしげと見る網戸越し

汝はまだ若きか蟻の働ける

コーヒーの湯気酔ひかとも蠅ふらり

なつかしき竹藪よりの大藪蚊

生き残りしはただ一樹のみ広島忌

た。式場には大畑善昭氏はじめ岩手支部の全員が参列して下さったほか中央からも「沖」の連衆が十余名、はるばると参加して下さいましたのは、望外の喜びであった。

贈賞式の後には記念パーティー。その後、選考委員と詩・短歌・俳句それぞれを受賞者の懇談会があるのだが、それは失敬して、岩手支部主催の祝賀会に夫婦で出席した。

翌日は詩歌文学館でバスを仕立て遠野へという企画だが、妻だけが参加、自分は岩手支部の記念句会に。

特選は多摩市から遙々参加の鈴木恭子さん。準特選は地元の工藤節朗さん。工藤氏は最高点でもあった。

林 翔



賽 炉

能村 研三

「沖」の夏

考へるための草取り続けをり

脈絡にこだはりつつの曝書かな

水打つて百個限定売り尽くす

ガリリツク利かせ夏負けなどはせぬ

「沖」創刊号の「五百字随想」で先師登四郎は「夏惜しむ」という文章を寄せている。登四郎は元々寒いの嫌いで自ら夏型人間を自負していたが、この文の中で「私は夏休みを楽しんでいる。殊に平素縛られた時間しか持っていない私にとって、自分の時間が自由にフルに使えることはたのしみである。」と述べ、「沖」創刊前の充実ぶりを「今が仕事のし時だという心がまあと責任感」と言う言葉で示した。

登四郎にとって「沖」という結社誌をもつはじめての夏で、創刊号に掲載する主宰として初めての作品十句と、八十八名の「沖作品」の選を行わなければならなかった。この年の夏は句集『枯野の沖』を出版したばかりで、句集の売りさばきや、俳句鑑賞辞典の執筆、俳句講座の講演、色紙短冊展など次々と仕事をこなさなければならなかった。

この時私はまだ二十歳の大学生で「沖」には直接関わっていないかったが、気の張った登四郎の充実ぶりは傍から見ても頼もしかった。

さて、今年の夏は私も忙しい。私は、職業柄財団の仕事の傍ら時間を

弓を射る音なき闘志棟咲く

長崎唐人屋敷

賽銭は炉で焼く習ひ朝曇

賽炉にて天へ小遣ひ南吹く

※賽炉とは死者に添える紙銭を燃やす炉のこと

日覆捲く坂段市場人気なし

猫がゐて唐人路地の古簾

風涼し媽祖に供へし朱蠟燭

作って動かなければならないのだが、六月、七月にかけて福岡、新潟、山形、静岡と各支部を訪れ支部の皆さんと親しく触れあひながら三十五周年に向けての支援と協力をお願いして廻った。中には人数の少ない支部もあったが、それぞれ先師の時代から「沖」に参加していただいている気概と誇りを持っており、その頼もしさに感動し、十月の東京での記念大会での再開を約束した。

「沖」の編集部からは例月号に加えて特集号に向けてコンクールの選や特別作品、随想など依頼も多い。幸い健康面の心配はないので、何とか乗り切りたいと思っている。コンクールも例年に比して応募も多く、創刊三十五周年に向けて皆さんの真剣な熱意がうれしい。

能村研三

蒼茫集



梅雨 仏

遠藤真砂明

沖雲や夏めくひかり噴き上げて
朴ひらきけり晴れ晴れと師の忌来る
息吸つて身に新緑の香を充たす
地のつづく限り日が射し麦の秋
まひまひや里の子だけが知る流れ
胎内に母の心音梅雨 仏

黴の花

鈴木節子

曾て蚤狩に招かれし
螢火の冷たさ坂巻純子思ふ
水流るるやうな色吊る衣紋竹
黒髪は風と遊べり川床料理
雨を聴くわれ一片の黴の花
雨傘のしづく詩なす芙美子の忌
達者なりと一行を添へ夏見舞

虹の端

河口仁志

登四郎忌過ぎて玉解く芭蕉かな
夏草の思ひの丈や兄の死後
虹の端掴みて赤子泣きぬたり
浮雲に触れむばかりの袋掛け
一途なる彫師の手許緑さす
若宮大路甘味処の新茶かな

青葉しづく

坂本京子

夕ぐれや浜屋顔は砂の星
海神の声を遥かに青葉潮
日照雨して青葉しづくの万華鏡
蕁菜池にて
師と同じ涼しき風を水辺かな
湿らせて深山の香り吊葱
ひとの世の波のはじめを浮袋

潮鳴集

胸の白 岡部玄治

山つばき流れに落ちて燃え直す
二人静ゆれて雨粒こぼしあふ
藤房の羽音をはらふひと揺らぎ
あめんぼう跳ねたりときに弾きあひ
胸の白はやまぎれなく燕の子

夏つばめ 勝田公子

順を待つ目がぶらんこを漕いでをり
しのび音の水のきららに山葵沢
木曾谷や落花の奈落底知れず
朝の日に山気の濡るる夏つばめ
郭公の次の声待つ坂がかり

歩荷の鈴 渡部節郎

木道に歩荷の鈴の涼しかり
大仏を振り向かせたき夏の山



江ノ島をあやしてをりぬ青葉潮
島裏や南風の高みに鳶の笛
湧く力形に見せて雲の峰
桜の実 廣島泰三

水上スキー弧の頂点に崩れたる
初鯉老に血の気の沸くことも
虫干や妻が手縫ひの子の産着
桜の実落ちて踏まれて仰がれて
振花や折れて素直に詫びようか

泪袋 成田昭男

炎天に洒れたる泪袋かな
甚平や人それぞれにそびら持ち
水打ちてたばしる風をおこしけり
床下まで夕日が射しぬ蟻地獄
峡の里蕪村の月の上りけり

沖作品



能村研三選

東京 齊藤 實

高木 嘉久

千葉 林 昭太郎

東京 中尾 公彦

蛇の衣草の途方にくれてをり
年輪をひとつ重ねて新樹かな
絵手紙に朝顔の苗はみだせり
玻璃の蠅滑り落つるを愛すなり
豆腐切る刃に涼しさを残しけり
空きの無いコインロッカー 駅薄暑
投手交代外野手の眼は蝶に
渾身のバックホームや夏つばめ
横長に使ふ葉書や麦の秋
サングラス取りまつ先に席譲る
ハモニカに鉄の味する麦の秋
はつきりと雨見えてくる新茶の香
牡丹の蔭熱くせり翅の音
鎌倉の緑が一つ飛んで鳥
紫陽花にバイクの鼓動来て停まる
無防備なまま人に合ふ桜の実

消しゴムに花のにほひや五月病
黄砂降る海の上にも国ざかひ
夕焼のもつと先みてゐるきりん
竹酔日コーヒー豆を深く焙り
蜻蛉生る和紙の軽さの風に乗り
はつ夏の風満載にオープンカー
フリーきつぷ青葉若葉を乗り継ぎて
シャンパンのしゅわつと梅雨の星増やす
雷兆すカーナビの指す現在地
春祭もぐら暗きに子を産みて
農葉の白濁八十八夜寒
卯の花や娘とたがふ読後感
きのふ来し朴の蕾にけふも来て
経緯儀の焦点おぼろ達治の忌
魚の吐く砂きらきらと夏はじめ
見上げては又すさりては朴の花

工藤 進

坂 ようこ

千葉 鈴掛 穂

日照雨して百万本の薔薇の揺れ
輪唱の声が声追ふ若楓

神奈川県

堀口 希望

薫風や旗艦三笠の小さきこと
ヨット群るむかし太陽族の海
草罨に足をとられし帰省かな
吊橋は峡の堅琴月おぼろ

新潟

長谷川 春

山脈の晴れてぞくぞく土筆の子
ものの芽に蹲る朝な朝なかな
花菜雨邑のかたち灯のともり
新聞の一面にのる黒き蟻

市川市

栗原 公子

揺れぬるや海市に住める人もまた
青葉風梳く土牢の古格子
初夏の光をこぼす砂時計
一本のバナナに還る少年期

東京

石川 笙児

初夏やスプーンに映る海の色
鎌倉や古鏡に似たる首夏の月
肌いまだ輝く鱒の一夜干
万緑を眠らすごとチェロ奏者

小嶋 洋子

こぼれ落つ星の音聴かむキャンプの夜
ランタンの炎膨らむ緑夜かな
日常は崩れては積む蟻の塔
半地下のこぼるる灯り夕薄暑

菊地 光子

尺蠖のちぢみて影を濃くしたり
横丁のはや賑はひて浮人形
半夏雨紅茶をまはず匙の音

囀や豎穴にある火の記憶
一つ家に二つの余生豆の飯
棚田いま水を湛へて風五月
学校の隣は役場麦の秋
千万の鏡のあそび柿若葉
乳飲み子の踵ふつくら若葉山
胡坐居の木地師八十八夜寒
母まとひたまふ涼しさとさみしさと
朴咲くと第一声のよく透り

長野

松澤 秀昭

埼玉

服部 早苗

千葉

安藤しおん

新人賞予選句（八月）

蛇の衣草の途方にくれてをり
横長に使ふ葉書や麦の秋
鎌倉の緑が一つ飛んで島
黄砂降る海の上にも国ざかひ
シャンパンのしゅわつと梅雨の星増やす
春祭もぐら暗きに子を産みて
経緯儀の焦点おぼろ達治の忌
ヨット群るむかし太陽族の海
吊橋は峡の堅琴月おぼろ
新聞の一面にのる黒き蟻

齊藤 實
高木 嘉久
林 昭太郎
中尾 公彦
工藤 進
坂 ようこ
鈴掛 穂
堀口 希望
長谷川 春
栗原 公子

沖作品 選後句評

*
能村研三

蛇の衣草の途方にくれてをり 齋藤 實

梅雨明けの頃、蛇は脱皮するが、その抜け殻は白っぽく薄く軽い。蛇の形をしていて少し光沢がある。完全な形で残っているものは少なく、この抜け殻を財布に入れておくとお金が溜まるという迷信もある。掲出の斎藤さんの句、草の上に脱ぎ捨てられた蛇の衣を草の側の意志を読み取って詠んだのがおもしろい。ぼうぼうと風情もなく茂る夏草の中に目にとまった蛇の衣、草の側から見ると途方に暮れて困っているのである。蛇の衣と夏草という二つの素材を独自の視点で句にしたのはおもしろい。同じ蛇の衣と夏草を詠んだ句に、芭蕉の句で「夏草に富貴を飾れ蛇の衣」という句があり、雑然と生い茂った夏草の中にも抜け殻はずいぶん豪華なものにも見えたのだろう。「豆腐切る刃に涼しさを残しけり」の句、切れ味のよい包丁で切られた豆腐のみずみずしさが描かれている。

横長に使ふ葉書や麦の秋 高木 嘉久

類想、類句には妥協を許さない高木さんの俳句姿勢にはいつも感服しているが、句の内容も洗練され益々磨きがかかってきた。掲出の句、二句一章の句で二物衝撃の句と言ってよいだろう。日常的に使う葉書と麦の秋という初夏の田園風景に広がる季語をぶつけあつて新しい空間を生み出した。縦書きが主流であつた手紙文、普通は縦長に使うのが常識であるが、横長に縦書きに書くものや、横書きに書くものなど自由な使い方が出来るようになった。形にはまらない自由さを讃える意味からも麦の秋という季語をもってきたのが面白い。「空きの無いコインロッカー駅薄暑」の句、東京駅や新宿駅などの大きな駅で見られる現象だが、空きのロッカーを探しまわる人の哀れさが描かれた。

鎌倉の緑が一つ飛んで島 林 昭太郎

鎌倉勉強会での収穫作品で、機知に富んだ句である。江の島は昔、現在の対岸、片瀬側とつながっていたものが、およそ二万年前に沈降運動により島として陸から離れたと推定されている。その後、完全に島として分離していたが、現在は干潮時には片瀬側へ歩いて渡れるようになった。この句はそんな事実関係はどうでもよく、周囲を山に囲まれ、海に面した鎌倉の町の緑が飛んで島を作ったという発想はおもしろい。鎌倉と言えば源頼朝が武家社会を作った町でもあり飛んでいった発想も頷ける。「ハモニカに鉄の味する麦の秋」の句、これは現在のハモニカというより、昔幼い頃に吹いた印象が頭に残っていたものが、麦の秋という季語によって今誘発されたのだろうか。(以下略)